

年間第二主日 2017.1.15

## 神の子羊・アニュス・デイ

ヨハネ 1章 29-34節

(そのとき、)ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。『わたしの後から一人の人が来られる。その方はわたしにまさる。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。わたしはこの方を知らなかった。しかし、この方がイスラエルに現れるために、わたしは、水で洗礼を授けに来た。」そしてヨハネは証しした。「わたしは、“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た。わたしはこの方を知らなかった。しかし、水で洗礼を授けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を授ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」

### 説教

終わるということは始まるということ、きょうのテキストはイエス揺籃期(ようらんき)の終わり、そしてイエス・キリスト福音の始まりです。

「洗礼を受ける⇒聖霊がくだる⇒天からの声が聞こえる」主の洗礼の記録をマタイ・マルコ・ルカの各福音書はこのような洗礼・聖霊・召命の三段階で現します。単純化・図式化したイエス洗礼の記録でなるほどねえ、とわかりやすいものとなっています。それに対してヨハネ福音書はちょっと複雑です。ヨハネ福音書にはイエスの洗礼の記述がありません。逆に3章でイエスが洗礼を授けていたという記事をおき、イエスがヨハネから洗礼を受けたことがほのめかされます。(ヨハネ3:32-4:2) またイエスに聖霊がくだったことは共観福音書ではイエスにおきた出来事「洗礼を受ける⇒聖霊がくだる⇒天からの声が聞こえる」として記述されますが、ヨハネ福音書では洗礼者ヨハネが神

から受けた預言の実現として、ヨハネが目撃したキリスト証言となり、間接的にイエスと聖霊の関係を示しています。

ヨハネ福音書はイエスの行動を直接記録するのではなく、その意味をあらわしているといわれます。もってまわった言い方をやめてしまえば、実際とは違うイエス像を描いているということです。それに対応してマルコ福音書ではイエスがこうやったああしたという事実を直接記録しています。マタイやルカの福音書ではイエスの行動に対してこれはコレコレこういう意味があるということを記載しているような印象があります。ところで、わたしたちは現実はその単純ではないことを実感として持っています。同じ出来事＝現実でも一人ひとりが違っているように、見る人が変われば同じ出来事でも違った意味を持つことがあります。その意味ではちょっとわかりづらいヨハネ福音書にこそ現実、真実が投影されているのかもしれない。

このことを踏まえて想像を膨らませると、きょうの福音はこう補足することもできそうです。

ある時イエスはヨハネから洗礼を受けた。毎日大勢の人が洗礼を受けに来ていたので、洗礼者ヨハネはその時のイエスのことをよく憶えてはいなかった。いく日かたってヨハネは再びイエスの姿を見て、びっくりして「神の子羊」とで呼んだ、つづけて「“霊”が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを見た」といった。

#### <ヨハネ福音書の七日間>

朗読では（そのとき）と読みましたが、聖書本文では1章29節は「その翌日」と始まります。「その翌日」は1章に全部で3回でてきます。一週間にたどるなら1章は初めのことば（序詞1章1-18節）に続いて、月・火・水・木の四日間の記録となります。この区分で分けてみればきょうの箇所は第二日（火曜日）の出来事となります。

ところでヨハネ福音書の二章はこう始まります。

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。ヨハネ 2:1  
この2章冒頭の「三日目」を足すと7日、ちょうど一週間になります。この  
足し算から、ヨハネ福音書の冒頭部分は受難の7日間と比較されたり、天地  
創造の7日間になぞらえられたりします。

神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の  
下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。  
夕べがあり、朝があつた。第二の日である。(創世記 1:6-8)

天地創造の第二日です。きょうのヨハネ福音に似ているような似ていないよ  
うな、感じです。みなさんそれぞれにイメージしてください。

<アニュス・デイ>

見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ ヨハネ 1:29

わたしたちにはなじみの深い「神の子羊」という呼び方はイエス・キリスト  
の称号のひとつです。イエスの称号はいろいろありますが、神の子羊もおお  
くの個所でイエスをさす称号としてつかわれているのだろうと調べてみたと  
ころ、ヨハネの1章にでてくるだけでほかにはありませんでした。これには  
ちょっとびっくりしました。なぜだろうと疑問にかんじましたが今のところ  
わたしにはよくわかりません。

神の子羊は、ラテン語では「Agnus Dei」と表記されカタカナで表せば「ア  
ニュス・デイ」となります。わたしたちが礼拝の中で歌うミサ曲の最後のタ  
イトルがアニュス・デイ、翻訳すれば神の子羊ということになります。

世の罪を除く神の小羊よ、憐れみをお与えください

世の罪を除く神の小羊よ、主の平安をお与えください

わたしたちはこのようにイエスに願い、祈りを捧げて拝領を授かり、新しい  
一週間に派遣されていくわけです。

あたまでイエスをわかるより、こころでイエスを知ることのほうが大切です。  
神の子羊と呼ばれるイエスのイメージが、一人ひとりのこころの中で豊かに  
膨らみますように。

-----